

(4) 極小未熟児の就学前発達

研究協力者 奈良 隆 寛
協同研究者 大野 勉

浜野 晋一郎 清水 正 樹

埼玉県立小児医療センターで昭和62年度に入院した極小未熟児は80名である。そのうち、15名が新生児期ならびに乳児期に死亡した。生存者65名のうち46名について、神経学的診察、神経心理学的検査と知能検査を行った。在胎週数の平均は 28.9 ± 3.0 週で、出生体重の平均は 1091.5 ± 280.0 gである。神経学的検査は班会議で検討した方法でチェックし、知能検査にはWPPSIを用いた。

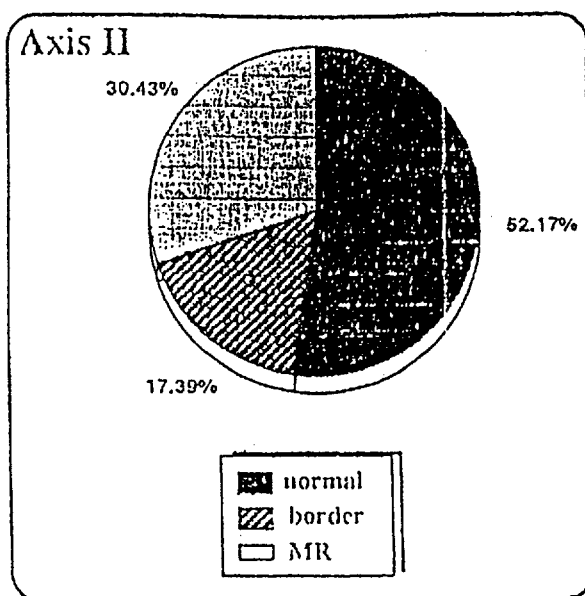
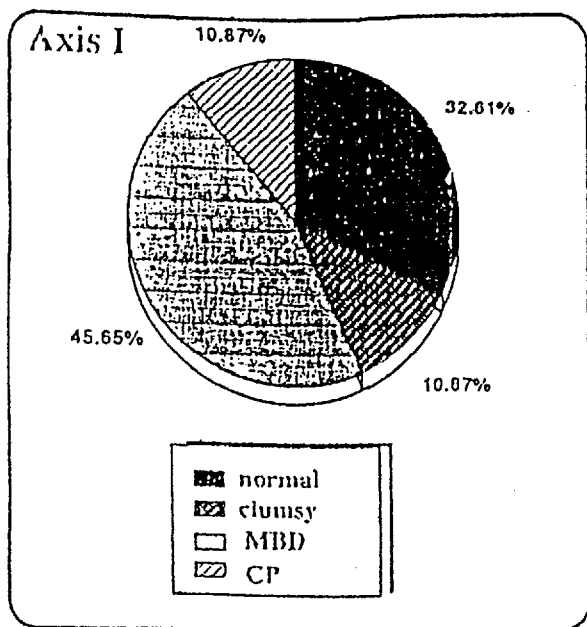
Axis Iについては、正常が15名、上肢に未熟性を持つ者(不器用)が5名、下肢に未熟性を持つ者(微細脳障害)が21名、脳性麻痺が5名にみられた。

Axis IIについては、正常が24名、境界が8名、知能障害が14名にみられた。IQの平均は 80.7 ± 23.9 であった。

VIQとPIQの差が15以上ある者については、PIQの方が高い者は9名にみられ、VIQの方が高い者は3名にみられた。

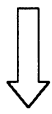
Axis IIIについては、視空間認知障害が11名、聴覚認知/記憶障害が4名、発達性言語障害が3例、発達性構音障害が2名、判定不能が5名にみられた。

Axis IとAxis IIとの関係については、脳性麻痺の5人は全て知能障害がみられ、微細脳障害の21名は知能障害が6名、境界が6名、正常が9名みられた。不器用の5名は正常が3名で、境界と知能障害が1名ずつみられた。Axis Iが正常な15名のうち、Axis IIが正常な者は12名で、1名が境界で、2名は知能障害であった。





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



埼玉県立小児医療センターで昭和 62 年度に入院した極小未熟児は 80 名である。そのうち、15 名が新生児期ならびに乳児期に死亡した。生存者 65 名のうち 46 名について、神経学的診察、神経心理学的検査と知能検査を行った。在胎週数の平均は 28.9 ± 3.0 週で、出生体重の平均は $1091.5 \pm 280.0\text{g}$ である。神経学的検査は班会議で検討した方法でチェックし、知能検査には WPPSI を用いた。